

## 6. 技術と職業の教育

### 裁縫女学校の存立構造と地域社会

—鶴岡裁縫学校の社会学的分析—

|         |                  |              |
|---------|------------------|--------------|
| ○鈴木 智道  | SUZUKI Tomomichi | 日本学術振興会特別研究員 |
| ○羽田野 慶子 | HATANO Keiko     | 東京大学大学院      |
| ○寺崎 里水  | TERASAKI Satomi  | お茶の水女子大学大学院  |
| 広田 照幸   | HIROTA Teruyuki  | 東京大学         |

#### I. 問題の所在

本報告は、山形県の一地方都市に設立されたある裁縫学校を対象にして、大正期から昭和初期にかけてこの学校が、地域社会との関係のなかでいかなる構造的基盤を有していたのかを、社会諸集団や地域の階層構造といった文脈に位置づけて考察することを目的としている。これまでの女子中等教育研究は、主として高等女学校を対象としながら、主にその法制的、理念的、思想的なレベルで研究が蓄積されてきた。しかし、その一翼を担った裁縫(女)学校については、地域の要望から自然発生的に生まれた女子中等教育機関として、それが大きな位置を占めていたとの指摘はあるものの、その具体的な姿はあまり明確にはされてこなかった。また、戦前期の多様な女子中等教育機関のあり方について、高女—実科高女—各種女学校が三層構造をなしていたとの指摘がなされているが、そのような構造は、設置者(国公立/私立)や高等教育との接続の有無、カリキュラムにおける家政教育の比重などといったアカデミックな尺度に基づいてのみ指摘できるものであり、入学者の属性や社会階層、地域における学校支持層などとの対応関係は、いまだ明らかにされていない。

そこで本報告では、ひとつの学校を事例にして、学校所蔵史料、学籍簿に基づく個票データやインタビュー・データなどをもとに、質的・量的に裁縫学校の姿を多面的に描き出すとともに、それを通して、裁縫学校が女性の社会化と地域社会の双方に対して果たしていた歴史的含意について考えてみたい。

#### II. 分析対象地域のプロフィール—省略—

#### III. 鶴岡裁縫学校の設立理念とカリキュラム

本報告の対象とする学校は、1924(大正13)年、山形県鶴岡市に設立された私立各種女学校、鶴岡裁縫学校(創立時「鶴岡裁縫塾」)である。鶴岡裁縫学校は、その創立者伊藤鶴代(1868~1933)が、1910(明治43)年、近隣の商家で私塾「裁縫研究会」(通称「伊藤塾」)を開いたところからその前史を持つ。当時の新聞にこの塾について「女学校をのみ卒業したのでは家庭の人と成るのにいろいろ不便が多いため、当地の良家では私のもとへ一年なり二年なり寄越します」(『鶴岡日報』1922年12月13日)という伊藤の言葉が紹介されているところから、学校設立以前の伊藤塾は、比較的裕福な家の娘を対象とした、嫁入り前の教養教育という性格の強いものであったと考えられる。鶴岡には、1897(明治30)年に設立された鶴岡高等女学校がすでにあり、伊藤塾はこの鶴岡高女の卒業生のための花嫁修業の場として、その位置づけが与えられていたといえよう。

その後、伊藤塾の卒業生は年々累積して増え続け、1920(大正9)年には卒業生同窓会「如蘭会」が、また、その前年の1919(大正8)年には伊藤鶴代を会長とする「庄内仏教婦人会」が結成される。この二つの団体の強力な支持のもと、伊藤塾は1924(大正13)年、「鶴岡裁縫塾」として新たに設立され、翌1925(大正14)年より山形県から私立学校の認可を受けて「鶴岡裁縫学校」へと発展していく。

学校設立当時(1925年)の「鶴岡裁縫学校学則」によると、当初は尋常小卒を対象とした修業年限1年の予科、高等小2年卒を対象とした修業年限2年の本科、高女卒を対象とした修業年限1~3年の研究科の3科が設けられ、翌年には入退塾時の別科が加えられている。予科及び本科の学科目は裁縫のほか修身、国語、算術、体操、家事の6科目であった。ここで、実科高女と比較すると、一般教育科目の社会と芸術科目の図画・音楽、そして実業の科目がないことが相違点として挙げられる。研究科では裁縫、修身、家事の3科目を学習することになっており、裁縫教授が主眼であった伊藤塾時代に比べて若干学習内容の拡大が見取れる。

設立理念は「本校は主として女子に裁縫手芸其の他婦人須知の事項を教授し殊に婦徳を涵養するに力(ママ)むるを以て目的とす」とあり、職業教育としての裁縫教育ではなく、家庭婦人育成のための裁縫教育を主眼としていたことが明確である。また、学則に付された「教授要旨」には、教科ごとにさらに詳しい教授方法が記されており、なかでも修身科の項には、「1. 本校生徒は後來家庭の主婦として恥ぢざる婦徳を涵養するを以て目的とするものなればなるべく倫理上高尚なる理論に馳せず務めて卑近なる実例により日常実践の方法を理解せしむべし」、「2. 我が国古代よりの女子の美風奨励して現時女子の弊風を非難攻撃すると共に務めて頑古固陋の思想を去り時代的新進思想の善導に注意すべし」とある。ここから、「高尚なる理論」より「卑近なる実例」、「現時女子の弊風」より「古代よりの女子の美風」を重んじる教育理念を有していたことがわかる。これは、現行の高等女学校教育に対するアンチ・テーゼとして解釈することができよう。

その後、この学校は1941(昭和16)年に校名を「鶴岡裁縫女学校」と改め、全面的な学則改正が行われる。さらに1944(昭和19)年、校名を「鶴岡技芸女学校」と改め、翌1945年、戦争の影響で廃校が議論された後、「鶴岡市立女子農業学校」として大きく組織改編されることとなる。

#### IV. 鶴岡裁縫学校入学者の数量分析

ここでは1924年以前の塾時代と学校昇格後の教育目的が大きく変化していることに注目し、『鶴岡裁縫学校学籍簿』から作成した鶴岡裁縫学校入学者データベースをもとに、数量的に学校利用層の趨勢を把握し、塾から学校へと制度的変化を遂げた鶴岡裁縫学校が地域においてどのような機能を果たしたのかを考察する。

第1に注目するのは塾時代と学校昇格以降の裁縫学校利用層の変化である。伊藤塾の第1回卒業生(1912年卒)から学校昇格

## 6. 技術と職業の教育

直前の13回卒業生(1924年卒)について、鶴岡高等女学校の卒業生名簿と照らし合わせると、第1回では本科と実科をあわせて89.2%を占めていた高等女学校の卒業生は、やや減少傾向をみせるものの5割前後で推移しており、伊藤塾が高等女学校卒業生と何らかの関係を持っていたことが裏付けられる。しかし鶴岡裁縫学校昇格後、高等女学校卒業という入学前学歴を持つ者は、入学資格が高等小学校2年修了であった本科で1%に満たないのはともかく、高等女学校卒業生を受け入れてもおかしくないはずの研究科でさえ71%と低い割合を示している。これは、鶴岡裁縫学校が伊藤塾時代とは全く異なった層を受け入れることになった可能性を示唆する。鶴岡裁縫学校は地域のどのような層の教育要求を満たしていたのだろうか。

そこで第2に、鶴岡裁縫学校入学者のうち、本科入学者と研究科入学者に注目して、この学校がどのような層から生徒を集めていたのかをみとめる。親の職業別では、本科、研究科いずれにおいても農林水産業が50%弱を占め、鶴岡裁縫学校が農林水産業を主な利用層としていたことがわかる。現住所別では、やはり本科、研究科ともに郡部(東西田川郡)があわせて75%を超えた。これらから、鶴岡裁縫学校は庄内地域において、東西田川両郡部の農林水産業の子女に大きな教育機会を提供する役割を果たしたといえる。また、親の職業と現住所を掛けあわせてみると、本科、研究科ともに、郡部の商工業よりも市内の商工業で、また市内の公務・自由業よりも郡部の公務・自由業で、それぞれ高い割合を示しており、鶴岡裁縫学校はすでに述べた郡部の農林水産業以外に、市内の商工業層と郡部の公務・自由業層の進学先としても重要な役割を果たしていたことが分かる。

裁縫学校昇格後の入学者数の趨勢をみると、①1930年までの急増期、②1931年から38年までの不振期、③1939年から43年までの本科急増期の3つに区分することができる。①から②にかけて入学者数全体が落ち込むなかで、農林水産業や東西田川郡がそれまでより10%前後の増加をみせ、逆に公務・自由業や鶴岡市内は大きく減少する。この傾向は本科よりも研究科でより顕著である。ここで、①と②の時期の利用層の変動はいったい何を意味するのだろうか。先に述べたように、伊藤塾は高等女学校卒業生を対象とする家庭婦人養成機関であった。①から②への変化は、この伊藤塾時代のイメージの薄れと、1933年の伊藤の死去およびそれに先立つ校長交代の影響とみることができる。孝子褒章を3度受けた鶴岡におけるカリスマの創立者の家庭婦人養成機関というアピールが弱まっていくなかで、鶴岡裁縫学校は独自の利用層を獲得しなければならなかったのではないだろうか。伊藤塾の裁縫学校昇格直前に起こった地域の女学校新設に関する論争のなかで、「地方民の実状」に応じた実科教育の必要性が主張されていたが、はからずも鶴岡裁縫学校はこの期待に応えるかたちで学校を存続させていくこととなったのである。

## V. 裁縫学校のレゾン・デートル

「裁縫教育」のもつ意味についてそれを理念的に追っていくかぎり、高等女学校も裁縫学校も、それが女性を対象とした教育機関であるというただ一点において、同一の祖上で理解しがちである。また裁縫学校は高等女学校との対比において、そのカリキュラムを「裁縫」に特化したもの、あるいは「地方の実情」に見合った「良妻賢母」教育機関といったような、いわば「第二の高等女学校」的な格差構造のなかで把握されることもある。しかし、この問題を子どもの進学意識や親の教育戦略といったレベルで引き受けた場合、高女ではなく裁縫学校といったような積極的な選択志向や、あるいは裁縫学校であれば許容されるような学校それ自体がもつある種の存在意義があったのではないか。というのも、それら学校間の差異をカリキュラムの違いや学校利用層の階層差といったレベルでのみ引き受けるとしたら、高女ほどではないにしても、多くの学費が必要であった裁縫学校にわざわざ進学する(させる)ことの意味というものが見えてこないからである。そこで、以下、高女卒業生と裁縫学校卒業生のインタビュー・データをもとに、生徒自身と彼女をとりまく環境やその社会化効果について見ていくなかで、女子中等教育機関の全体構造のなかにおける裁縫学校の意義について考察していく。

高女卒業生に特徴的なのは、本人もまた親も、そのほとんどが高女へ入学することが、なかば当たり前のように考えられていたところにある。このことは逆に言えば、高女へ入ることを当たり前だと思わせるだけの社会化環境(とりわけ家庭環境)がそこになければ、高女へは入学しないということの意味している。当時、仮に鶴岡近隣地域の女性が上級学校に進学しようと思えば、①尋常小→高女、②尋常小→裁縫学校予科→本科、③尋常小→高等小→裁縫学校本科、という「選択肢」があったはずである。しかし、高女へ行くことが「当たり前」であった人たちにとっては、②や③のパターンは目に入っていないか、無視されていた。いわば「選択肢」が「選択肢」として機能していない状況が、そこにはあったのである。

では、裁縫学校は高女へ行けない人たちが集まった学校だったのだろうか。裁縫学校卒業生の話から浮かび上がる学校への進学の契機は、高女に行けないからというよりも、高女へ行かせたくない親を持っていたということである。その意味で、高女と裁縫学校は、女子中等教育機関内部で上下の階層構造を持っていたというよりも、ある種の「棲み分け」が行われていたと考えられるのである。この時期の学歴主義の拡大は、ある一部の人たちにとって、非常に大きなジレンマを伴っていたといえる。子どもに「学校教育」というものをより長い期間つけさせてあげたい、そんな親の願望は、しかし、それがそのまま「高女へ子どもを行かせたい」という学歴主義とは必ずしも直結しない状況というものが見られたのである。尋常小卒や高等小卒が当たり前だと考えられていた層と高女へ行くことが当たり前だと考えられていた層に挟まれるように存在していた層——それが裁縫学校を支えた人たちだったのである。

では、裁縫学校は、高女と違って、どのような意義やメリットがあったのだろうか。ここでは以下の3つの要素に注目したい。①地域移動や職業移動の可能性が少ないということ。②子どもを生意気にする「学問」ではなく、裁縫という「実学」によって実用の可能性が開けたり、家事上の有用性が明らかだったこと。③婚姻市場によりよい立場で参入できること。いわば、結果論的にはあるものの、カリキュラムが「裁縫」に特化していること、そのこと自体が、「子どもに教育を授けたい」が「高女ではダメだ」という2つのアンビヴァレントな意識を仲介する緩衝材となりえていたということであり、また同時に、それによって親が進学を許可しやすい状況を作りだしていたということである。その意味で、裁縫学校は、「第二の高女」や「地域密着型の高女」というイメージではなく、「高女とは異質な学校」だとイメージされたところこそ、その存在意義があったといえるだろう。

\*具体的な文献・資料・データは紙幅の都合で省略したが、当日、レジュメとして配布予定。